Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-06-08

ピエール・ブルデューの「文化生産の場」：分析枠組としての可能性

松田，いりあ

(Citation)
社会学雑誌,17:169-178

(Issue Date)
2000-03-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010955

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010955

ピエール・ブルデューの「文化生産の場」

——分析枠組としての可能性

松田いりあ
神戸大学大学院文化学研究科博士課程

はじめに

文化＝象徴体系（言語、神話、芸術、科学……）が社会の影響の外にあると考えその内的構造の分析に専心する分析と、それが価値やイデオロギーとして社会構造なり階級なりに果たす外的機能にしか関心を寄せない分析という想像上の——現実の分析はおそらく両者の間にしか存在しないから——分業が文化社会学にあると仮定する。こうした分業のもとでは、文化に固有の構造とそれが果たす社会的機能とはそれぞれ別個の対象を構成することになろう。ピエール・ブルデューがまさに疑問視しているのは、文化の構造と機能をめぐるこのような分析視角の対立である。文化社会学に「われわれの時代の宗教社会学」（Bourdieu, 1980b＝一九九一、二五二頁）をみるブルデューは、この種の分業の上に安住する「避難所」としてではない中心的な役割、いってみれば文化を経済や政治に比肩する説明要因にする役割をあらためて文化社会学に求めようとしているといえる。[1]

文化の構造と機能という伝統的な区別は、とはいえ社会学だけのものではない。それは作品そのものとそれを生み出した社会（作者や観衆の生きていた時代、出自、流派、制度、市場、技術革新……といった「社会的背景」）との区別という形で、潜在的には、文学研究、美術史や思想史などにも存在するのではないだろうか。ブルデューは、こうした区別と分業が、集合的ないし個人的な作品＝文化生産物を創造されざる創造物とみなす「絶対的自律性の幻想」と、それを単に階級支配の産物かその目的に供せられるものとみなす「還元論」という両極端な視点を生み出してきたと批判する。[2]彼の「文化生産の場」という分析枠組の導入は、ある作品＝文化生産物（その形式や内容）の出現や個々の生産物に対する嗜好を、「自律性の幻想」と

も「還元論」とも異なる視点から説明することを目指すものである。

本稿では、ブルデューの著作に即しながら「文化生産の場」の分析枠組としての可能性を再確認したい。ただしこれは自体で完結することを意図したものではない。場と文化生産の関係が、構造と実践というより一般的な関係の一ケースでしかないことからすれば、ここでの目的も自ずと限定される。要するに、本稿は個別の文化分析に場のモデルを役立てるための準備作業である。

ブルデューにおける文化＝象徴体系の位置

文化の諸理論は、それぞれ文化＝象徴体系をそれぞれ世界を認識する手段（カント、カッシーラー、デュルケーム）、言語のようにあらかじめ構造化されたコミュニケーションと社会統合の手段（構造主義、デュルケーム）、支配の手段（ウェーバー、マルクス）とみなしてきた（Bourdieu, 1991）。これに対して、ブルデューは象徴体系を「構造化されているがゆえに構造化する支配の手段」（ibid.: 168）として一括し、認識、コミュニケーション、支配というこれら三つの機能を統合しようとする。つまり象徴体系が論理的二項対立（結合／分離、包摂／排除……）によって構造化されていることが、行為者がそこに示された対立によって社会的世界を構造化する（理解する）ための前提であり、社会的世界のそのような構造化が支配者／被支配者との対立を誤認させ（見過ごさせ）再生産しているということである。

このことは具体的には、さまざまな実践の領域――ブルデューの場合、身体動作、空間構造、芸術、教育制度等――において、人や物を分類するために用いられる高い／低い、広い／狭い、精神的／物質的、独自な／ありふれたなどの形容詞の対から、さらには学部や学科の分類にいたるまでが、「社会秩序の最も根本的な対立」すなわち労働と性の分業での支配者／被支配者の対立の婉曲化されたものだということである。一見論理的な対立も社会的な対立に基礎をおいているために人々に自明なものとして受け入れられ、この対立をそれとは気づかれない形式のもとで再生産することを可能にしているとブルデューはみている。

文化＝象徴体系の二つの機能が不可分のものであることは、象徴体系の力の起源をめぐるブルデューの見方にもあらわれている。構造主義であれば、象徴体系の世界を構造化する力、それがさまざまな行為者に世界の一定のイメージをもたらす力の起源を象徴体系の論理自体の所与性に求めることだろう。確かにブルデューは、象徴体系が言語のように二項対立によって構造化されているとする点で構造主義にしたがっている。だが彼にとって象徴体系の力の

起源は社会的なものであり、それもデュルケームの「社会的拘束」よりは「階級支配」に近い。したがってブルデューにおいて、象徴体系の力は、象徴の論理そのものでも、象徴を生み出す社会にもなく、象徴体系の階級構造に対する関係のなかこそ見い出される。「特定の社会集団の行為者はみな一連の基本的な知覚図式を共有している」（Bourdieu, 1979＝一九九〇、三四〇頁）のだが、象徴体系は「分類すると同時に分類するものを分類する」。つまり行為者自身が同じ象徴体系なかでも示差的な位置を求めて争っている以上、彼らはそれに対して決して等しい関係にあるわけではない。「統合する文化（コミュニケーションの機能）は分割する文化（差異化の機能）でもあり、他のあらゆる文化（下位文化として名指される）に対して支配文化との距離によって自らを定義することを強制することで差異を正統化する文化でもある」（Bourdieu, 1991: 167）。象徴体系内の対立や分類に占める個人や集団の位置自体が彼らの認識の対象（「分類するものを分類する」）でもあるとすれば、それは自ずと「知識の道具というよりもむしろ力の道具」（Bourdieu, 1979＝一九九〇、三五四頁）と化す。自らを象徴体系の分類上のよりよい位置を割り当てようとする行為者の闘争、要するに、「分類闘争は、個人的なものであれ集団的なものであれ、すべて階級闘争の忘れられた一側面なのだ」（前掲書、三六四頁）。ただし、ブルデューが通常の経済的な領域だけでなく象徴的な領域にも利害を認める以上、これは象徴闘争が階級闘争に過ぎないということでは決してない。階級闘争の状態が維持されるのも、それが象徴闘争として誤認されている限りにおいてなのである。

ブルデューはこの文化＝象徴体系の論理的・政治的機能を、社会構造の水準では分業に現われているとみている。いいかえると、分業と階級分化の存在する社会において、象徴体系の生産つまり文化生産の専門家は、不可避的に「力の諸関係」を「意味の諸関係」として誤認させることに寄与しているとみなされているのである。

支配の分業と文化生産の場

ブルデューは支配関係が「人と人の相互作用のなかで・相互作用によって形成され、解体され、再建される」社会と「『自動調整市場』、教育制度あるいは法的装置といった客観的・制度的メカニズムに媒介されているために、事物が不透明になり永続するようになって支配関係が個々人には自覚されず個々人の手の届かないところに行ってしまうような」社会とを区別している（Bourdieu, 1980a＝一九八八、二一五～二一六頁）。これら政治、経済、文化といった諸領域の分化にともなう諸「資本」の客観化によって、

近代社会では富と文化が資本として蓄積の対象になる。ブルデューにとって、分業とは、分化した諸領域の自律性に基づく非人格的・間接的な支配の正統化つまり「支配の分業」である。そしてこの支配の分業から現われた経済資本と文化資本という社会の主要な序列化の原理から、ブルデューは三つの場を描き出す。まず文化資本と経済資本の総量と各資本の比率によって構造化された「社会空間（社会的位置空間）」つまり階級闘争の場。ついでこの社会空間において「さまざまな〈場〉で支配的な位置を占めるために必要な資本（特に経済資本や文化資本）を所有している」（Bourdieu, 1992＝一九九六、六六頁）制度、集団、行為者、いわゆる「支配階級」によって構成される「権力場」。そしてこの権力場の内部にあって経済資本よりも文化資本に富んだ部分、資本間の序列から「権力場内部において世俗的レベルでは被支配的位置を占める」（前掲書、六八頁）行為者や制度からなる「文化生産の場」。

ブルデューはこれら三つの場の間に構造的な相同性をみる。まず「あらゆる特殊化した場［……］は同じひとつの論理、つまり所有されている特定資本の量［……］によって組織される傾向がある」。これは社会階級の場から文化生産の場まで、あらゆる場に共通する属性である。そしてさらに「特定資本の量の最も豊かな層と最も貧しい層、支配者と被支配者、現所有者と所有志願者、古顔と新顔、卓越性と上昇志向、正統と異端、後衛と前衛、秩序と運動、等々のあいだにそのつど成りたつ対立関係は、それらの間でたがいに相同である［……］一方、社会諸階級の場を組織する対立関係（支配者対被支配者）または支配階級という場を形成する対立関係（支配集団対被支配集団）とも相同である」（Bourdieu, 1979＝一九九〇、三五五頁）。先回りすると、ブルデューにとっては、場が固有の資本の配分構造によって構造化されていることとさまざまな場の間に相同性が存在することが、文化生産の場の動きを決定している。

だがこの権力場内部での支配の分業は意図的な共謀を意味するものではない。それどころか「さまざまな権力（あるいは種々の資本の）保持者同士」である文化や経済の専門家たちは「さまざまな種類の資本の相対的な価値」を「変化させること、あるいは保守することを、その賭金＝争点」（同上）とし、「完璧な人間のもつべき美徳を通して支配権行使のための正統的資格を得ることをめざす」（前掲書、一四六頁）ことを闘争の究極目標にしている。つまり、この支配の分業はあくまで、「イデオロギー生産の領域と社会諸階級の領域との相同を媒介にして」（Bourdieu, 1991：168）、当事者である専門家には気づかれにくい形でおこなわれているのである。

したがって文化生産が、支配が誤認されるつまり認知さ

れずに承認されるための際立った場所になりうるのは、それが社会秩序をおおっぴらに正当化しているからではない。つまり宗教教義における世界のイメージの教え込みや学校教育制度による裁定は、特権層に「幸福の神義論」をもたらすことだけで社会の再生産に寄与しているのではない。それはむしろ客観的なメカニズムによる。学校を例にすると、それは「正統なもの」／「値しないもの」／「非正統なもの」、「教えられるに値するもの」／「値しないもの」についてさまざまな社会集団の間に最小限の定義をもたらそうとする。しかし学校が、文化＝教養の獲得を「利害に囚われない」ものとみなし、文化を聖別し再生産する学校での成功を「天賦の才」によるものと考え、要するに自らが「正統なもの」とみなす対象の社会的可能性の条件を不問にすると、結果として「社会ヒエラルヒーと学校ヒエラルヒーの再生産を正統化する」（Bourdieu and Passeron, 1970＝一九九一、二二七頁）。文化の生産や獲得を「稀少性」に結び付けるメカニズムは、意図しようとしまいと、人々を「持つもの」／「持たざるもの」に区別し、文化を差異化の手段にすることに貢献する。教育制度は、階級構造や経済システムから完全に自律しているわけでもなく、またそれらの反映にすぎないわけでもない。それは自らの「社会的役割をおおい隠し、そうすることで当の役割を有効に果たす」（前掲書、一九五頁）ことで、要するに誤認に基づいてその社会的機能を果たしているのである。

文化生産の場の構造

支配の分業の一側面である専門家による文化生産は、集団の全成員による生産とは次の点で異なる。まず文化生産物が蓄積される財として差異化に役立てられる条件が出現する点。そして、それにともなって文化生産がドクサつまり暗黙のままにとどまっている状態から正統と異端の絶えざる論争状態へと移行する点。文化生産の専門家集団、制度からなる空間＝「場」の概念は、ウェーバーの宗教社会学における「預言者」「祭司」という宗教の専門家相互の闘争がモデルになっている。つまり専門家による文化生産の原型は宗教世界に求められているのである。

宗教の専門家（宗教的行為者）によって争われているのは、正統な宗教的実践つまり世界の正統なイメージの生産とその押し付けによる世俗の人々の信仰の独占である。専門家は宗教「場」で占めている客観的位置に応じて、信仰の独占をめぐる闘争を場に固有のやり方で行うことになる。この客観的位置とは、正統な宗教資本が保証するものつまり場の現状で正統とみなされている既存の宗教的実践を再生産することに利害をもつ立場（祭司）と、その正統性を疑問に付し新たな宗教的実践を生産する異端の立場（預言

者）である。場の外部からの要求は、専門家のハビトゥスなどを介して、この闘争の展開に影響を与えないわけではないものの、その影響は場に固有の形態を帯びるのであり、場の自律性が高まるにつれて闘争はますます場に固有の形式に従うようになる。宗教的実践の専門家が場の外部の世俗の人々の期待に応じるのは、彼らに固有の利害をめぐる闘争によってである。「文化生産の場」は、この宗教の専門家による闘争の場が一般化されたものとみなされる。

「文化生産の場」とは、一言でいうなら特定の資本の所有量によってそこに位置づけられる生産者（集団）、正統性認証と再生産の機関および制度からなる客観的諸関係である。そこには大きくいって二つの対立が存在し、それらが場を形作っている。ひとつは権力場からの自律性の度合（時代によっても社会によっても変化する）をめぐる対立である。つまり場の外部の要求とりわけ経済的、政治的な要求に従属する他律的原理と、場に固有の規範や裁定に従う自律的原理という二つの序列化原理のいずれが支配的になるかに応じて、場はさまざまな形をとることになる。大規模生産と限定生産の下位場はここから生じる。これは従来大衆文化と高級文化という形で示されてきた区別に重なる。

大規模生産の場では他律的序列化原理が支配し、非生産者の観衆に向けた生産が行われる。生産者や生産物の序列は、観衆の数（商業的成功）や質（社会的地位）によって決まる。この下位場を維持しているのは、巨大かつ複雑な文化産業である。一方限定生産の場では「正統的文化」が争われる。つまり問題になる時点で文学、絵画等々の諸芸術の正統な実践の形態が争われる。そこでの生産は生産者がそのまま消費者であるような生産者のための生産の様相を帯び、経済的利益をはじめあらゆる世俗的利害よりも、同じ生産者とりわけすでに正統性の確立された生産者による認知が重要になる。つまりこの下位場での序列は同業者による承認や聖別という「象徴資本」の蓄積に基づいている。この限定生産の場における生産者や生産物は、聖別化と再生産の機関である博物館、ギャラリー、図書館、学校教育制度や文学・芸術の歴史そのものによって守られている。

文化生産の場におけるもうひとつの対立は、大規模生産の場と限定生産の場各々の内部での対立である。限定生産の場にはすでに正統性を確立した生産者とその正統性に疑問を投げかける（新たに正統性を求める）生産者との対立がある。宗教場にみられたように、正統性を確立した生産者は生産物に関する既存の定義を再生産することに関心をもつのに対して、これから正統性を確立しようとする生産者はそのような定義を覆す生産によって生産物に関する定義そのものの変革に関心をもつ傾向がある。この結果場における生産者の位置と生産物（位置決定）との間に相同な関係が現われることになる。一方、大規模生産の場では場

そのものの自律性が低いこともあって、生産者と生産物の序列は観衆によって決まるため、内部の対立はより小さい。

文化生産物の多元的決定

文化生産の場と権力場との相同性があるだけでなく前者の後者からの自律性の度合が変化すること、そして場に固有の論理が存在することによって、文化生産物は多元的に決定されている。したがって「絶対的自律性の幻想」がみるのとは異なり、生産者がある生産物を生み出すにいたるのは偶然や「天賦の才」によるものではなく、場における彼らの位置に刻み込まれた生産物の潜在的な可能性を選択した結果である。これはなにも生産者を矮小化するものではない。というのも、生産の潜在的可能性にそれと気づくようになるためには、場の歴史や現状に通じていることが条件になるからである。そして場に固有の論理をみとめるだけではまだ十分ではない。場の相同性は、異なる場の行為者を相互に結びつける以上、純粋に場に向けて生み出された「作品が内部的闘争において果たす機能は、どうしても外部的機能をともなうことになる」(Bourdieu, 1979＝一九九〇、三六九頁)のである。

一方「還元論」は、文化生産の担う既成秩序の「保守イデオローグ」としての役割に注意を払ってきた。しかし場に固有の論理というものは、これらイデオローグにも及んでいる。彼らが場に所属している限り、彼らもまた先にみた権力場内部の「完璧な人間のもつべき美徳」をめぐる闘争――教養か富か――に加わっている。したがって保守イデオローグの役割も、自覚的な計算によるものというよりむしろ、場の相同性に由来する「副産物」なのである。「支配的言説の厳密にイデオロギー的な効果が果たされるのは［イデオロギー生産の場の］構造と［階級闘争の場＝社会の］構造との対応による」(Bourdieu, 1991：169)。このことは「有機的知識人」に関してもあてはまる。文化生産者は権力場さらには文化生産の場そのもののなかで被支配的な位置にあることによって、社会空間のなかの被支配者に対して共感し、保守イデオローグとは反対に既成の社会秩序への異議申し立てをおこなう可能性がある。「権力場の中の被支配者と、全体としての社会界の中での被支配者との間の相同性こそが、［……］蓄積された社会的エネルギーの一部が被支配者のために言わば流用される現象への、社会学的な解答を提供する」(Bourdieu, 1984＝一九九七、二五四頁)。場における正統と異端は、所有する資本の量によって相関的に決まるということであった。正統との争いのなかで異端が勝利する可能性が、部分的には場の外部の人々の支持を得ることにかかっている以上、有機的知識人という立場もまた、場に固有の論理によって強

いられたものであるか、その論理をくつがえそうとする利害にもとづいたものである可能性は否定できない。

「場」のモデルによる分析に向けて――小結

本稿がこれまで「文化生産の場」に注目してきたのは、文化を対象にする多くの専門分野を悩ませてきた文化生産の社会的機能や文化生産物の様式の変化の問題に、このモデルが一つの有力な答えを示しているという見込みからであった。そして文化生産の場の権力場からの自律性が「時代と国民的伝統によってかなりの程度変化する」（Bourdieu, 1992＝一九九六、七三頁）以上、いまや求められているのはこのモデルを個々の場の構築に生かし、そこから具体的な成果を引き出すことだろう。もちろんこれは理論と経験（データ）分析とを区別した上で、それらを別個にそして段階的に実行に移すということではない。というのも、場の客観的諸関係に含まれるもの、つまり場に固有の資本、資本量によって場の異なる位置をしめる生産者、聖別と再生産の機関や制度、そしてこの諸関係上の位置に結び付いた戦略などはすべて、場のモデルと実際の分析を同時に視野にいれながらでなければそもそもみつけることができないからである。

最後に、文化生産の場のモデルから得られる知見をブルデュー自身がどのような実践的関心に結びつけているのかということに少し触れておきたい。それはつまりあらゆる文化生産を、直接社会的、経済的条件やカリスマ的創造者＝作者に結びつけるのではなく、行為者や制度の場によって構造化される利害関心、そして場や生産者のハビトゥスを通じて及ぼされる権力場や階級闘争の影響に結びつけることで、結局彼が何を意図しているのかという問題である。それは芸術や科学の営みをすべて利害関心に帰することで台無しにする、シニカルな相対主義でしかないのだろうか。

ブルデューは従来知識人が「社会参加」か「象牙の塔」かという二律背反に拘束されていたという（Bourdieu, 1989）。この二律背反は、いうまでもなく生産物の「還元論」と「絶対的自律性」の対立にも並行してきた。だが社会参加そのものも知識人の場での戦略という面を免れない以上、場に固有の論理に裏打ちされていなければ、それも場において威信の低い者が外部の権力に訴える「トロイの木馬」にすぎない。だが自律性もまた、それが権力場からの自律を求める知識の場の内外における闘争の歴史の産物である以上、場の外部の諸力の存在を考慮せずに守られてきたものではない。そうである以上、ブルデューはむしろ芸術、科学、文学といった相対的に自律的な場への所属とそこで認められた権威（象徴資本）こそを、社会参加に結

びつけるべきだという。一九世紀末のフランス知識人に体現されていたこの役割は、それを可能にしていた条件である知識人の場の自律性が奪われていくにしたがって、現在掘り崩されつつある。とくに国家や私企業による庇護や限定生産と大量生産の相互浸透などによって、生産物の価値を決定する権限を奪われるという形で、文化生産の場の自律性は脅威にさらされているとブルデューはみている。(3)

文化生産を取り囲む諸条件を知ることによってのみ、場の自律性を守ることができるということ。また知識人の社会参加の可能性そのものが場の自律性に内在しているということ。これらを考慮にいれれば、社会参加も象牙の塔も互いに矛盾するものではありえない。文化生産を、場に固有のそれにせよ、生産者には必ずしも気づかれていない利害に関連させる一見相対主義と受け取られかねないブルデューの方法も、文化生産のもつ可能性――彼はそれを普遍性の探求といってはばからない――の真の条件を見定め、文化生産がもたらすことのできる普遍性を場の外部にまで普遍化するためにとられたものなのである。

註

(1) 文化主義、マルクス主義、構造主義などさまざまな分析の潮流を受け入れてきた「文化研究」もまた、文化の構造と機能との対立を越えようとする同様の関心を有しているといえるかもしれない（Hall, 1981）。

(2) ブルデューは宗教教義、文学、芸術、科学など象徴体系の生産とそれに従事する行為者（専門家）をそれぞれ「文化生産（象徴生産）」、「文化生産者」として一括し、個々の生産の「場」には固有の論理や資本だけでなく、文化生産の場としての共通の特性があると考えている。また彼は生産という語に、とりわけ芸術作品の作者＝創造者のカリスマ的表象からの断絶の意図をこめている。

(3) 場の量的拡大（「文化仲介者」の重要性の増大）と自律性の浸食（文化と経済の「脱分化」）などに注目するマイク・フェザーストーンやスコット・ラッシュらの「ポストモダニズム」研究については、フェザーストーン（1991）およびラッシュ（一九九七）を参照。

文献

Bourdieu, Pierre, 1971a, "Genèse et structure du champ religieux", *Revue française de Sociologie* 12.

――, 1971b, "Une interprétation de la théorie de la religion selon Max Weber", *Archives Européenne de Sociologie* 12.

――, 1971c, "The thinkable and the unthinkable", *Times Literary Supplement* 15.＝福井憲彦、山本哲士訳「考えられるも

のと考えられないもの」『アクト』no.1 日本エディタースクール出版部、一九八六。
——, 1977, *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.
——, 1979, *La Distinction*, Paris: Editions de Minuit.＝石井洋二郎訳『ディスタンクシオン』1・2 藤原書店、一九九〇。
——, 1980a, *Le Sens Pratique*, Paris: Editions de Minuit.＝今村仁司他訳『実践感覚』1・2 みすず書房、一九八八。
——, 1980b, *Questions de Sociologie*, Paris: Editions de Minuit.＝田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店、一九九一。
——, 1984, *Homo Academicus*, Paris: Editions de Minuit.＝石崎晴己、東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店、一九九七。
——, 1987, *Chose Dites*, Paris: Editions de Minuit.＝石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店、一九九一。
——, 1989, "The corporatism of the universal: The role of intellectuals in the Modern World", *Telos* 81.
——, *1991a*, *"On symbolic power", J.B. Thompson(ed.), Language and Symbolic Power*, Cambridge: Polity.
——, 1991b, *The Field of Cultural Production*, Cambridge: Polity.
——, 1992, *Les Règles de l'art*, Paris: Editions de Seuil.＝石井洋二郎訳『芸術の規則』1・2 藤原書店、一九九五、一九九六。
ブルデュー、ピエール、一九九〇、加藤晴久編『ピエール・ブルデュー』藤原書店。
Bourdieu, Pierre et Jean-Claude Passeron, 1970, *La Reproduction*, Paris: Editions de Minuit.＝宮島喬訳『再生産』藤原書店、一九九一。
Featherstone, Mike, 1990, *ConsumerCulture and Postmodernism*, London: Sage.
Frow, John, 1995, *Cultural Studies and Cultural Value*, Oxford: Oxford University Press.
Hall, Stuart, 1981, "Cultural studies: Two paradigms", T. Bennett et al.(eds.), *Culture, Ideology and Social Process: A Reader*, Buckingham: Open University Press.
ラッシュ、スコット、一九九七、田中義久監訳『ポストモダニティの社会学』法政大学出版局。